

第4回狭山ニュータウン地区活性化指針策定委員会議事録（要旨）

日時	平成30年11月13日（火）午後1時30分～
場所	大阪狭山市役所 3階 協議会室
出席者	上甫木委員長、小野副委員長、菊屋委員、疋田委員、宮下委員、吾妻委員、俵委員、橋本委員、岡田委員、小川委員、前川委員、山田委員、芥子委員、中杉委員、田中委員、楠委員、山崎委員
次第	1 狭山ニュータウン地区活性化指針骨子（素案）について 2 その他

1 会の成立 委員総数 19 名について 18 名の出席があり、過半数の出席によって会の成立を確認した。	
議題 1 狭山ニュータウン地区活性化指針骨子（素案）について 資料 1、2 について事務局より説明があった。	
	I 活性化指針とは、II 資源と課題
委員	頁 2、市立こども園の位置の修正をお願いします。
委員	頁 2 以降の地図において、南中学校区の範囲及び狭山ニュータウン地区の範囲を示して欲しい。
事務局	中学校区とニュータウンの境界を検討する。南中学校区についても検討の視野に入れながら、狭山ニュータウン地区の活性化指針を検討する。人口や施設などはニュータウンで考える。
委員	頁 5、青少年健全育成連絡会は、南第一、南第三小学校区の活動が止まっているため、青少年指導員と入れ替えてはどうか。
委員長	頁 10、年齢別の定住意向に着目すると、子育て前の青年層や、高齢者手前の現役世代への働きかけが重要と思われる。
委員	市職員が率先して地域活動を支えて欲しい。地域活動の担い手として、市職員が参加する取組みを広げていきたい。
委員	指針とは別に第 5 次総合計画が検討されていることもあって、指針の取組みは弱いのではないかと感じている。近大病院が転出することに危機感を感じて委員会に参加した。計画をつくって、活性化に向けた取組みを具体化できる指針としたい。
事務局	今年度は指針の策定をめざしており、活性化に向けた大きな方向性を示したい。具体的な計画をつくることは考えていない。指針で上げた一つひとつの取組みについて、地域と行政が一緒に取り組んでいきたい。
委員長	指針の位置づけについては、背景と目的に書かれており、近大病院の移転についても述べられている。
事務局	総合計画の検討では、南中学校区のエリアで施策を検討することになる。総合計画は基本計画、実施計画の体系に基づくものであり、この指針とは別枠で考えてほしい。
委員	読んだ人が今後のまちづくりに期待できるような指針としたい。インセンティブがあって、それぞれの取組みにつながるようにしたい。
	III 将来像、IV 取組項目
委員	取組項目について、自治会活動に係る取組みが必要ではないか。自主防災組織などは自治会ベースの地域活動であり、円卓会議や婦人会もベースは自治会である。課題に対応して自治会活動促進の取組みを上げて欲しい。
事務局	頁 29、1-6 地域活動団体の交流の促進で、自治会活動について取り上げている。頁 4、コミュニティ・地域活動の資源で、自治会は地域コミュニティの形成に欠かすことのできない活動団体である、と位置づけている。他の地域団体と自治会

	は分けて考えている。
委員	頁 35、自主防災組織については、5-1 自主防災組織の活動促進、が取り組みとして上がっている。
委員長	5-1 防災活動の促進、としてはどうか。
委員	指針の取り組みを実施すると今後のあるべき姿に近づいていく。6つの取組項目の内容や進め方について、5W1Hなどの検討が必要になる。共通のプラットフォームづくりなど、推進体制がもう少し見えてくるとよい。
	V 具体化に向けて
委員	シンポジウムでは、指針をどのように実現していくのか、実現化方策について質問が出るのが予想されるので、答えを用意しておく必要がある。
委員	頁 37、3-1 地域包括ケアシステムの構築については既に取り組みがあるので、フェーズⅢではなく、Ⅰ、Ⅱではないか。
委員長	既に進められている取り組みについては、フェーズを前倒しにしてはどうか。
	ニュータウンの顔として中心ゾーンのあり方
委員	先だって、狭山ニュータウンのまち歩きを行ったが、商業施設周辺の交通渋滞が目立った。コノミヤ、松源、銀行、コミセンの立地する約 50 メートルの間に駐車場の出入口が 4 箇所もあり、危険である。安心して買い物できるまちに向けて、ニュータウンの中心部分の再開発を取り組みとしてあげて欲しい。
事務局	頁 17、商業施設における渋滞について課題として書いており、頁 33、4-4 道路等の計画的な維持、バリアフリー化の推進、で取り組みを上げている。コミセンは建替の計画はないため、市としての再開発の動きはない。取り組みとして引き続き事業者働きかけていく。
委員	ニュータウンの顔の再整備であり、活性化に向けた取り組みとして委員会から提案できるとよい。住民や事業者を巻き込んでいく必要がある。駐車場を一体化して生じた活用可能スペースにオープンカフェができるとよい。
委員	郵便局へは横断歩道を渡る必要がある。10 年後ぐらいにはイオンモールのように、安全でバリアフリーな空間を実現したい。
委員	頁 33、4-1 まちづくりルールの見直しにおいて、考え方を示している。都市計画マスタープランや地区計画の仕組みを使って、住民や事業者を交えて検討していきたい。
委員	施設整備について 10 年後の青写真を描くことができないか。
委員	事業者が相手なので、柔軟な発想をもとに皆で検討していくことが望ましい。近大病院の移転についても同様である。
委員	指針を基にして協議会をつくり、事業者を巻き込みながら取り組みを進めていきたい。まちの中心が再整備され、近大病院跡が変わることがイメージできれば、若い世代の転入につながる。
委員長	地区の中心に位置づけられた場所であり、取り組みとしてはニュータウンの顔づくり、といった表現ではないか。PFI などの民間活力の導入手法が考えられる。指針の具体化に向けて、協議会などのプラットフォームにおいて、自分事になるように、地域、事業者、行政の役割を明確に示すことができるとよい。
委員	官民一体となって、ニュータウンの中心に賑わいの場をつくっていかう、といった表現ができる。
	取組項目の実施主体
委員	アドバランを上げるだけでなく、行政ができることを書いて示して欲しい。
委員	取組項目の実施主体、誰がやるのが大切である。
委員長	具体的な取組は行政だけではなく、プラットフォームに係る様々な主体が取り組むことになる。
委員	指針の主語は行政になっており、皆でやろうといった機運になりにくい。取り組みによっては、住民、事業者を主語にして書くことができるとよい。指針はプラッ

委員長 副委員長	トフォームづくりがポイントになる。 指針の策定主体は行政であるが、取組みの主体は地域、事業者、行政である。 ニュータウンの顔となる施設検討については、これまでどんな施設をつくってきたのか把握して、その上でどうしていくのが問われる。人口減少社会を迎えているがニュートンは世代交代していない。どのようにして、どんな姿に世代交代していくのか共有し、それを実現するのが指針である。その認識の上でプラットフォームをつくりたい。
委員	公共交通網の再整備について 頁 32、33、4-5 公共交通サービスの再整備について、サービス内容の充実に努めるとあるが、充実の捉え方は難しい。バス交通は最大公約数を対象としたサービスであり、あり方について公共交通事業者と協議します、といった表現が望ましい。3-2 新たなサービス機能の誘導は、バス交通との関わりはどうなるのか。
委員 委員 事務局 委員長 委員	特養やデイサービスの空き車輛を使って、ボランティア等が移送を行っている。 公共交通機関と同じルートを走ることは望ましくない。 3-2 新たなサービス機能の誘導は、公共交通機関と輻輳する内容ではない。 頁 12、課題については、公共交通機関に配慮した記述として欲しい。
委員 委員	利便性の向上については個人差が大きいが、バス交通は最大公約数のサービスとなる。ニーズが多様化しているなかで、利便性の向上は難しいと考えている。 泉ヶ丘直行便の検討についてはどうか。
委員 委員	直行便についても検討を進めたい。
委員	取組みの実施主体とプラットフォームについて 千里ニュータウンの再生指針も参考にして欲しい。取組みごとに実施主体を示している。1-3 多様な住まいの供給・流通の促進は事業者中心の取組みになる。4-7 緑のネットワークの形成は、住民と行政の取組みになる。フェーズⅠからⅢに加えて、継続中の欄があるとよい。
委員長 委員	取組主体を示すと、プラットフォームづくりが見えてくる。 頁 20、暮らしの姿として、世代交代ができるかが問われる。円卓会議も世代交代が課題である。
副委員長 委員長	世代交代は無理矢理進めるものではない。 将来像や暮らしの姿として、世代交代に加えて、多様な世代の交流、中高年層との交流が望まれる。
委員	まちが縮小していく中で、意識を変えていく必要がある。バスがないところで育ったので不便は感じていないし、歩いて行ける場所に行政の出張所や小児科があるなど、便利である。ニュータウンを培ってきた世代から若い世代へ、まちの魅力を受けついで行く必要がある。
委員長	泉北スタイル、奥河内の暮らしといった打ち出し方で、新しい世代にこれからの狭山ニュータウンの暮らしを伝えたい。まちの魅力を引き出しながら、新しい生活スタイルをつくっていききたい。 誇りや魅力などのまちのDNAは何か、どのようにして引き継ぐのか示したい。 一人暮らしの人が増えており、人と人とのつながりが薄れている。コミセンやカフェなどの場を活かす、情報を発信するなどにより、新たに人がつながるとよい。 NP0 などの活動が取り上げられておらず、現状の人のつながりが見えていない。 将来的なネットワークが見えていない。どんなネットワークをつくと豊かになるのかが示せるとよい。
委員長	指針の具体化に向けて、モデル的な取組みを通じてプラットフォームを形成するとしている。プラットフォームづくりの重要性を示したい。モデル的な取組みを通じて学習して意識が高まることで、プラットフォーム構築につながる。関係性をしっかりしておく必要がある。 若い世代に向けた指針の打ち出し

副委員長	人口減少による縮小化社会と言われているが、コンデンス化、濃縮化する社会といった見方もできる。そこでは生活の質が上がっていくイメージを共有したい。どのようにして質を上げていくのか、ソフトの力を示すことができるとよい。
委員	右肩上がりの世代は、人口減少などのマイナス面を注目してしまう。
副委員長	右肩上がりの社会は環境負荷が大きいし、その発想から脱する必要がある。若い世代は現在に対して充足しており、現在を最大限に生きていくスタイルを求めている。
委員	子育て世代は、現在に対して悲観よりも満足感の方が大きいのではないか。通勤時間は多少かかっても、人情があり空気がよいこのまちに戻ってきた。30 分で難波に行けるし、特急も止まる。住んでいる人たちが生活を楽しんでいる様子を示せるとよい。
委員	狭山ニュータウンは意外と便利、といった打ち出し方は面白い。
委員長	子育て層など若い世代には取組みの段階で参加して欲しい。
委員	近大病院や帝塚山学院大学が移転することに対して危機感をもっている。年々地価が下がっており、何らかの手を打つ必要がある。地域の価値が下がると、若い人たちは入ってこない。泉北ニュータウンは鉄道の本数が増えているし、近大病院も移転する。一方で南海高野線は本数が減るなど、地の利が下がっている。近大病院に替わる新しい魅力を入れていく必要がある。
委員	地価が安くなれば若い世代が入って来やすくなるのではないか。
委員長	指針ができて終わりではなく、取組みを通じて指針を具体化していく必要がある。取組項目に欠けているものがないか見てほしい。全体のネットワークが見えないといった意見があった。取組みの主体を入れていくと、プラットフォームにおけるネットワークが見えてくるのではないか。
委員	頁 33、4-4 バリアフリー化の推進について、歩道自体がバリアになっている。ヨーロッパの道には歩道はなく、フラットである。車いす利用者は小さな段差でもバリアになる。
事務局	歩道のバリアフリー整備を進めており、できるところはフラットにしていくという趣旨である。
委員長	歩道と道路の切り下げ等、基準に沿ってバリアフリー化が進められている。
委員	頁 38、主体のイメージについて、具体的な大学名が入るのか。
委員長	大阪府立大学や帝塚山学院大学が連携主体として想定される。
議題 2 その他	
狭山ニュータウン地区活性化シンポジウムについて事務局より説明があった。現在の申込みは 29 名である。参加の呼びかけを行うことになった。 関係団体ヒアリングの実施（大阪府、南海電鉄㈱、民生委員・児童委員、不動産事業者、商工会事業者、南中学校区円卓会議、青少年健全育成連絡会）について報告があった。	
次回委員会の日程について	
第 5 回策定委員会 日時 平成 30 年 12 月 17 日（月）午前 9:30～ 活性化シンポジウムについて 日時 平成 30 年 12 月 1 日（土）午前 10 時～ 場所 コミュニティセンター	